

住宅取材の累計実績 **1000** 件超

リノベーション専門誌

『relife+ (リライフプラス)』が読み解く、 令和の暮らし×リノベーション

PROFILE /

君島喜美子 『relife+ (リライフプラス)』編集長

きみじま きみこ／1998年扶桑社入社。「ESSE」「皇室」編集部勤務を経て2007年より「住まいの設計」編集部
部に配属。2009年に日本初のマンションリノベーション専門誌「relife+」を創刊。2024年6月に50号を迎えた。
「リノベーション・オブ・ザ・イヤー」「性能向上リノベデザインアワード」等の選考委員も務める

『relife+ (リライフプラス)』とは…

注文住宅を建てたい人向けの住宅
情報誌『住まいの設計』(1960年
創刊、現在は休刊)の姉妹誌として、
2009年7月に創刊。日本初のマ
ンションリノベーション専門誌とし
て4カ月おきに発行をスタート。創
刊号の表紙に使用した写真は、東
京・福生市の米軍住宅をリノベ
ーションして暮らしていた男性2人
組のアーティスト・antosのアトリ
エ兼自邸。撮影は写真家の本城直
季さん。右は2024年6月に発行
されたvol.50。



期待を込めて「いまどんなリノベーションがトレンドですか？」と聞かれることがとても多い。正直なところ答えにくい質問なのだが、インテリアという観点ではトレンドと言い切れるものはないと感じている。北欧風、ブルックリン風、和モダン、などという単純な言葉では表現できない場合が多く、様々な要素が入り混じったその人ならではのインテリアがほとんどだからだ。強いて言うのならミックスインテリア、ということになるのかもしれない。

そこで、この質問をされた時は、こんな理由でリノベーションする人が増えている、こんな間取りが好まれている、という住まい方、暮らし方のトレンドを具体的な例を挙げながらお話するようにしている。

ここでご紹介する「令和の暮らし×リノベーションを読み解く10のヒント」は、2009年の創刊以来、15年間で累計1000件超のリノベーション事例取材を通して、多くの人に求められている、また私自身が好ましいと感じた傾向やメソッドをまとめたものである。「いまどんなリノベーションがトレンドですか？」という問いの答えになっていれば幸いである。

※掲載物件施主の年齢は全て取材時のものです

令和の暮らし×リノベーションを読み解く10のヒント

HINT 01 リスペクトを込めて 限りなく既存を生かす

既存へのリスペクトやSDGs的な観点から、魅力的な既存の設備や建具、造作家具などを生かし、新旧をうまく馴染ませるリノベーションが増えている。

HINT 02 結露の解消と温熱環境の 改善はマスト

度重なる電気料金の値上げや気候変動、自然災害の増加といった背景もあり、断熱・耐震改修をはじめとした性能向上に関する住まい手の意識は確実に高まりつつある。

HINT 03 子どもの独立が50代～60代を リノベへと突き動かす

経済的、時間的にもゆとりがあり「頭も体も元気なうちに家を住みやすくしておきたい」という意識が強く、子どもの独立を機に持ち家をリノベするケースが多い。

HINT 04 アウトドアを日常的に楽しむ

気軽に、日々の暮らしの中でアウトドアを楽しめる仕掛けは今後ますますリノベーションに求められる要素のひとつに。

HINT 05 超郊外とちょい郊外

物件選びの際、駅からの距離や通勤の利便性は必ずしも最優先事項ではなくなりつつあり、コスパのいいちょい郊外や超郊外の物件を選ぶケースが増えている。

HINT 06 脱衣室を飛び出した洗面所

コロナ禍の影響もあり、洗面所を廊下や玄関土間に配置したり、洗面所を2か所設ける間取りがスタンダードになりつつある。

HINT 07 食こそが暮らしの中心

リノベでこだわりたいのはキッチン、というニーズは変わっていないが、キッチンは食を通じて人と人がつながる場、という要素が近年より強くなっている。

HINT 08 家ではたらく

会社員であっても家で仕事をするのが一般的に。家族とつながりつつほどよく集中できるワークスペースが求められている。

HINT 09 家事ラクの装置としての 間取りと収納

とにかく忙しくて時間がない共働き・子育て中の夫婦が住まいに求めるのは家事ラク。そのポイントは動線と収納。

HINT 10 小上がりはいつの時代も やっぱり万能！

収納スペース確保のためだけではなく、多目的に使えるスペースとして、家族が集う場として、また構造的な問題の解決策としての小上がりが増えている。

リスペクトを込めて 限りなく既存を生かす

Nさん夫妻が暮らすのは1969年築の木造二階建て。元々は英文学者の住まいで、その後購入した施主がリフォームを施し、Nさん夫妻が三代目の施主だそう。天井まで棚が造り付けられた階段室は新築時からあったものをそのまま利用している。また、キッチンを実用的かつレトロモダンなデザインの吊り棚や食器棚を生かしつつ、汚れが目立っていたシンクはカウンターや下部の収納と一緒に造作。古いものと新しいものが馴染むよう、内装の素材選びやトーンを抑えた色使いに配慮されている。ライフプラスを創刊した2009年頃はスケルトンにして新築のようにゼロからつくり上げるリノベーションをする人も多かったが、近年は既存へのリスペクトやSDGs的な観点から、魅力的な既存の設備や建具、造作家具などを生かし、新旧をうまく馴染ませるリノベーションが増えていると感じる。もちろん不動産や建築資材の価格高騰というネガティブな背景とも無関係ではないが、良いものを長く大切に使うという意識の高まりや、古き良きディテールが住まいに個性をプラスしてくれる、という価値観が浸透してきていることの表れではないだろうか。

東京都武蔵野市 N邸

夫57歳（CGデザイナー） 妻57歳（CGデザイナー）

工事費：約1700万円

延床面積：86.11㎡（1階59.90㎡、2階15.87㎡）

既存建物の竣工年：1969年

設計：長久保健二設計事務所

施工：ヤック

撮影：山田耕司



1. リビング脇に配された鉄骨の白い梁は、前の施主によるリフォームの痕跡。現しのまま取り込み、ミックス感を楽しんでいる



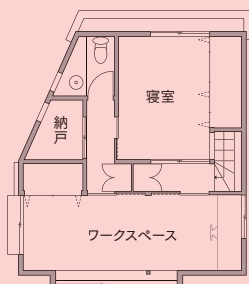
2. 階段室は、この家を購入した当時のまま。壁いっぱいの本棚は、新築時の家主がDIYで造り付けたもの



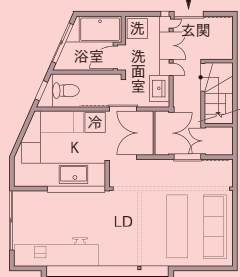
3,4. 使い勝手のいい吊り棚や背面収納、食器棚は既存のまま生かしている。ガスコンロも既存を再利用



After 2F



After 1F

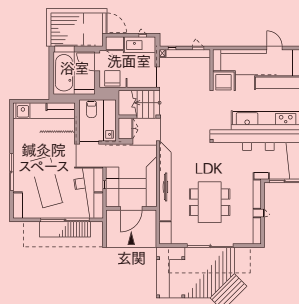


間取りを大きく変更した唯一の場所は洗面室。トイレの前の廊下を洗面室につくり替えた。トイレと洗面室の扉を撤去してオープンにすることで一体化させ、使い勝手のいい空間に

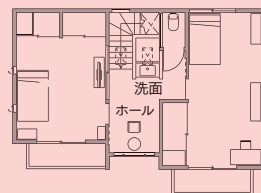
千葉県市原市 Y邸

工事費：約 2000 万円（2014 年の竣工時）
延床面積：124.85 ㎡（1 階 71.42㎡、2 階 53.43㎡）
既存建物の竣工年：1993 年
設計：野口修アーキテクツアトリエ
施工：中野工務店
撮影：山田耕司

After 1F



After 2F



1階の和室を鍼灸院に改修。トイレを玄関近くに移動して患者さんの動線をスムーズにし、プライベート空間とのエリア分けを行った。大きなワンルームとなったLDKは、造作家具を取り入れることで豊かな住空間に。第22回千葉県建築文化賞（平成27年度）優秀賞〈住宅の部〉を受賞。

HINT 02

結露の解消と温熱環境の改善はマスト

冬場、ストーブのスイッチを入れようとする室温が0℃と出るくらい寒い家だったというYさん夫妻が暮らすのは、大手ハウスメーカーによる軽量鉄骨造の分譲住宅。新築で購入して20年ほど暮らしていたが、寒さや結露に辟易していたこともあり、断熱性能の向上を最優先にリノベーションした。軽量鉄骨の骨組みや外装、窓の位置はそのままに高性能な断熱材を入れ、既存のサッシはペアガラスに変更。結果、室内の温熱環境は格段に改善されたという。元々住んでいた家をリノベーションする場合、「北側の個室が寒くて冬場は結露がひどく、カビが発生して困っていた」という話をよく耳にする。度重なる電気料金の値上げや気候変動、自然災害の増加といった背景もあり、断熱・耐震改修をはじめとした性能向上に関する住まい手の意識は確実に高まりつつある。また、2024年4月からは国土交通省、経済産業省及び環境省の3省合同による「住宅省エネ2024キャンペーン」がスタートし、予算総額は4615億円



1. 「本に囲まれて暮らしたい」という希望がかなえられたLDK 2. ホールに面して洗面台を設け、洗面台の奥の部分を吹き抜けにしてトップライトからの光を1階に落としている。夫の寝室の間仕切り壁には、気配が伝わるよう室内窓を設置 3. 以前のリフォームで土の面積を減らし、管理をラクにした庭。内窓を入れたことで結露も解消した

という大規模な補助事業が進められていることも後押しとなっている。Y邸は10年前に竣工した事例だが、今後こうしたお宅が増えていくことは間違いないだろう。

HINT 03

子どもの独立が50～60代を リノベへと突き動かす

令和2年の国勢調査によると、日本の生涯未婚率は、男性が28.25%、女性が17.85%と年々増加しているものの、結婚や出産、子どもの入学といったライフステージの変化によって住宅取得や住み替え、持ち家のリノベーションなどを検討する人は少なくない。中でも多いと感じるのは子どもの独立後に50～60代の夫婦が持ち家をリノベーションするケース。コンパクトな家への住み替えを検討してみたものの、住み慣れた環境やコミュニティを手放したくないという理由から持ち家リノベーションを選択する人は多い。Tさん夫妻も、長女の進学を機に、長年暮らしてきたマンションをフルリノベーション。内装には自然素材を使用し、通風と温熱環境の改善で住宅性能を高め、夫婦ふたりで先々までストレスなく住める家を実現した。この世代は経済的、時間的にもゆとりがあり「頭も体も元気なうちに家を住みやすくしておきたい」という意識が強い。また、大切にしている生活習慣や好きなものがはっきりしているので、優先順位が明確でリノベーションの完成度、満足度が高いのも特徴といえる。



1. 縁に腰掛けることもできる小上がりを併設したリビングスペースは、掃き出し窓にペアガラスの内窓を取り付け、全体が引き込める障子を設置 2. キッチンの作業スペースを広く確保し、洗面室や浴室へ一直線に接続して快適な家事動線に



1. 2002年築のマンションをリノベ。30㎡以上ある広いルーフバルコニーは購入を決めるきっかけのひとつだった（設計・施工：フィールドガレッジ／撮影：山田耕司） 2. toolbox スタッフ小尾絵里奈さんの鎌倉の自邸。なんと国産材のバレルサウナを購入して庭に設置している（設計・施工：toolbox／撮影：水谷綾子） 3. 専有面積80㎡、ルーフバルコニー約70㎡という1970年築のマンションをリノベ。ルーフバルコニーと一体感のある開放的な間取りに（設計：一級建築士事務所 大場英明建築設計事務所／撮影：山田耕司） 4. 1970年築のマンションをリノベ。専有庭に人工芝を敷いて子どもと遊んだり、食事を楽しんだりしている（設計・施工：nuリノベーション／撮影：山田耕司）

兵庫県西宮市 T邸

夫50歳(会社員) 妻53歳(会社員)

専有面積：62.55㎡

既存マンションの竣工年：1998年築

設計：マスタープラン/小谷和也設計室

施工：池田住宅建設

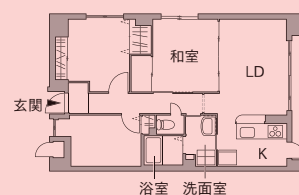
撮影：川隅知明

3. ペニンシュラ型だったキッチン窓側から離してアイランド型にし、回遊動線を確保

After



Before



細分化された3LDKから、小上がりの畳スペース付きのゆとりある1LDKへ。窓を設けるため共用廊下側へ移動した浴室を含めて南側は水回りのみでまとめ、一直線の家事動線を実現。キッチンは回遊できて使いやすいアイランド型に変更した



HINT 04

アウトドアを日常的に楽しむ

「趣味はキャンプ」という30～40代の施主はとても多い。キャンプ用の家具や食器、ランタンといったギア類を日常使いしたり、デッキや庭にテントを張って過ごすといった楽しみ方も当たり前となりつつある。また、家にいるときもアウトドアを楽しみたい、とルーフテラスや専有庭のあるマンションを選んだり、室内と外の境界が曖昧な間取りを採用する例も多い。個人的には、労働環境が大きく変化し、仕事でPCに向き合う時間が長くなったことがアウトドアブームの一因なのではないかと考えている。だが実は、昔も今も、大人も子どもも、やはり外で過ごすのは単純に気持ちがいい、というごくシンプルな理由なのかもしれない。週末、郊外に出掛けてキャンプを楽しむのもいいけれど、もっと気軽に、日々の暮らしの中でアウトドアを楽しめる仕掛けは今後ますますリノベーションに求められる要素のひとつになると感じている。

HINT 05

ちょい郊外と超郊外



ちょい郊外

都立大学（東京都目黒区）→ 藤が丘（神奈川県横浜市）

夫妻の職場はともに港区内。「買い物も都内が多いので、在宅勤務でも都内へのアクセスは重視しました」（妻）。さらに理想としたのは、ルーフバルコニーのあるマンション。「ルーフバルコニーを優先したら郊外になった、という感じ。藤が丘は、渋谷へのアクセスがいいし、犬の散歩に最適な大きな公園が近くにあるのも魅力です」（夫）。夫のワークスペースは玄関土間脇に、妻のワークスペースは寝室内に配置した。ルーフバルコニーの人工芝や家具などは前のオーナーからそのまま譲り受けたそう。



神奈川県横浜市 | 邸

夫39歳（会社員） 妻38歳（会社員）

既存マンションの築年：2002年

専有面積：75.20㎡

設計・施工：空間社

撮影：松井 進

HINT 06

脱衣室を飛び出した洗面所

脱衣室に洗面所があると湿気がこもりやすく、さらに家族の誰かが入浴中は洗面所を使用しにくい、というのは意外と切実な問題である。家族の人数が多ければ、なおさら深刻だ。であればいっそ洗面所を脱衣室から出してしまえばいい。もしくは洗面所を2か所つくってしまおう。そんな間取りが増えている。コロナ禍を経てその傾向はますます強くなった。また、コンパクトな物件の場合、脱衣室のスペースを確保するために廊下に洗面を設ける間取りはとても有効だ。よく見られるのは玄関土間や廊下に設けるケースだが、中には寝室やWIC内に設けるお宅も。また、脱衣室内には機能性重視で住設メーカーの洗面化粧台を設置し、玄関土間や廊下はゲストも使うことを想定して、デザインにこだわった洗面ボウル、水栓、タイルなどを取り入れたおしゃれな洗面所に、とメリハリをつけて2か所に配置するケースも多く見られる。

1. 廊下に配置したオープンな洗面コーナー。脱衣室を広く確保するために提案されたプランだったが、「帰ってきてすぐに手を洗えるし、デザインも気に入っているの、使うたびに気分が上がります」と夫妻（設計・施工：nuリノベーション／撮影：水谷綾子）
2. バルコニーに面した大きな窓のある洗面室はランドリーも兼ねる。「明るい場所で洗濯をしたい」という妻の言葉から生まれたそう。ホテルの設計も手掛ける建築家のアイデアで、支柱の内部に電気配線を通して照明＆曇り止めつきの鏡を設置。広々としたカウンターではアイロンがけもできる（設計：Sデザインファーム／施工：小川共立建設／撮影：中村風詩人）



超 郊 外

都内 → 神奈川県座間市 → 神奈川県秦野市

以前はブルスタジオが企画・設計監修した賃貸住宅「ホシノタニ団地」(神奈川県座間市)に住んでいた夫妻。特に地縁があったわけではなく、環境や住み心地を優先しての選択だった。5年間の定期借家契約が終わるタイミングで、神奈川県秦野市内のマンションを購入してリノベーションした。夫は都内、妻は千葉県に通勤しており「朝早く起きなければならないのはちょっと大変ですが、猫たちと快適に暮らせる現在の住まいをととても気に入っています」と夫妻。



神奈川県秦野市 H 邸

夫 41 歳 (美容師) 妻 33 歳 (会社員)

既存マンションの竣工年：1984 年

専有面積：約 85.48㎡

設計：ブルスタジオ

施工：住環境ジャパン

撮影：星垣 (扶桑社)

コロナ禍による在宅勤務の普及や都心の不動産価格の高騰といった背景によって、神奈川、千葉、埼玉などのちよい郊外で物件を購入するケースは増えている。夫婦どちらかの実家に近いといった理由からそうした選択をするケースもあるが、H 邸のように、特に地縁がなくても手頃な価格や緑豊かな環境を気に入って、というケースも少なくない。しかも、「超郊外」と言ってもいいくらい都心からの距離があり、夫婦ともに県外で働いているのも注目すべき点。物件選びの際、駅からの距離や通勤の利便性は必ずしも最優先事項ではなくなりつつあり、在宅勤務がしやすいスペースを確保できる広さや周辺環境の良さを重視し、コスパのいいちよい郊外、超郊外の物件を選ぶケースは今後も増えていくのではないだろうか。



3. 洗面室とは別にWIC内に設けた洗面スペース。メイクやスキンケアを楽しくできるように、という妻の希望をかなえた(設計・施工：SOUKEN/撮影：高永三津子) **4.** 夫妻が「洗面島」と呼ぶオープンなサニタリー。洗面台をテーブルのように見立て、サニタリーの主役として配置。天板にはラフな素材感と色味を楽しめるモールドテックスを採用(設計・施工：nu リノベーション/撮影：水谷綾子)



食こそが暮らしの中心

1. 食後すぐに食器を下げられるように、テーブルとシンクはフラットにつなげた。アイランドキッチンのまわりはゆったりしていて、ストレスなく複数人で作業できる



リノベーションでいちばんこだわりたいのはキッチン、というニーズが多いのは創刊当時から変わらない。キッチンは料理や食事の場であることはもちろんだが、親しい人を招いたり、つくった料理を撮影してSNSに投稿したり、食を通じて人と人がつながる場、という要素がより強くなっているように感じる。S邸の間取りで特筆すべきは冷凍庫と冷蔵庫を別々に配置している点。冷蔵庫は業務用のアンダーカウンタータイプだ。ちなみに夫妻は食に関する仕事をしているわけではなく、一般的な会社員である。夫妻は立地の良い中古

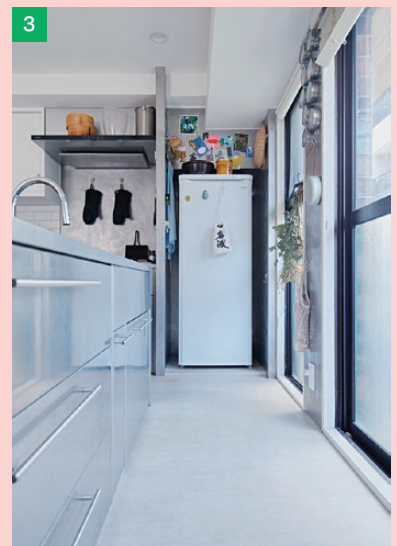
マンションを購入してしばらくはそのまま住んでいたが、どうにもキッチンの使い勝手が悪く、料理好きな夫妻の不満は募り、キッチンを中心にしたスペースをリノベーションした。中央にテーブルと一体化したアイランドカウンターを設置し、回遊性を確保したDKを実現。このカウンターは調理台でもあり収納でもあり、大人数で集えるダイニングテーブルでもある。つくるのも食べるのも大好き、という夫妻の家には友人たちがよく訪れるようになり、取り寄せた食材などが毎日のように届くので、大きな冷凍庫は大活躍しているそうだ。

東京都 S邸

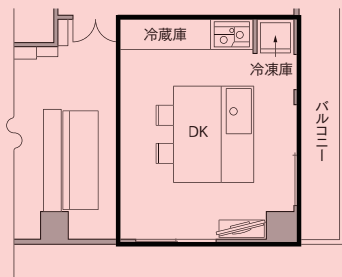
夫45歳(会社員) 妻47歳(フリーランスPR)

既存マンションの竣工年：1979年
専有面積：約85.48㎡
設計・施工：エム・デザイン
撮影：星亘(扶桑社)

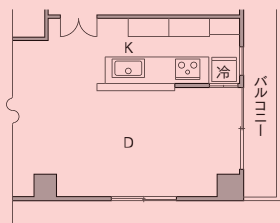
2. 築年の古いマンションのため既存の冷蔵庫スペースが狭く、大型冷蔵庫が入らないと分かったため、冷凍庫と冷蔵庫を分けて設置したが、これが大正解だった 3. コンロを設置した壁側のカウンター下部には業務用の冷蔵庫を組み込んでいる。内部は家庭用の冷蔵庫と違って細かく仕切られていないので、自由に使えるのもお気に入りだそう



After



Before

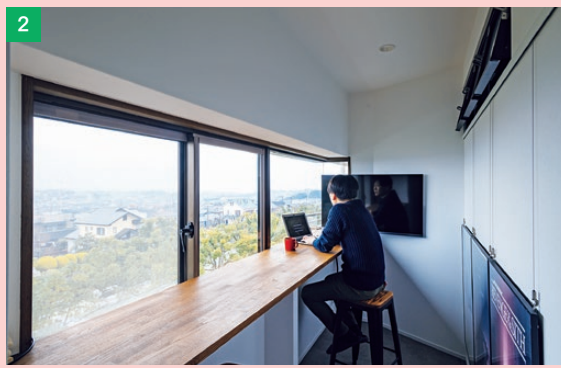


もとの対面式キッチンは背面収納との間が狭く動きづらかったため、キッチンとダイニングを分断していたカウンターを撤去し、中央にテーブルと一体化したアイランドキッチンを設置。「友人が遊びに来たときは、勝手にいろいろ出してくれると助かるので(笑)、全面に引き出しをつけてもらいました」と妻

HINT 08

家ではたらく

コロナ禍前は、記事中で誌面でSOHO (Small Office Home Office) という言葉をよく使用しており、「リノベでSOHOを実現しよう」という趣旨の特集を何度か組んだこともあったが、最近は記事中でSOHOという言葉をもっと使わなくなり、他のメディアでも目にもしなくなったと感じている。その理由は、会社員であっても家で仕事をするのが一般的になったからではないだろうか。また、インターネットやSNSの普及によって、オフィスを構えなくても起業できるようになったことも大きな要因のひとつだと考えられる。コロナ禍の最中から、リノベーションのタイミングでワークスペースを設けるケースはかなり多くなり、間取りのバリエーションもさまざまなタイプのもを見かけるようになった。個室として完全に独立したワークスペースを設けるケースもあるが、リビングを何らかの形で仕切って設けるケースが多く、家族とのつながりも感じられつつ、ほどよく集中できる環境を重視する人が多いと感じている。



1. リビングの一角に造作した本棚の近くにデスクを置き、自営業の夫のワークスペースとして使用。「ここに住み始めてからは、自宅にいるほうが仕事がはかどります」と夫(設計・施工: SHUKEN re/撮影: 水谷綾子) 2. 手前に緑、その先には海、晴れた日は東京タワーやスカイツリーまで見渡せる最高の眺望。この場所をどちらかの個室にするのは忍びなく、ビュールーム兼夫婦共有のワークスペースとして使用しているそう(設計・施工: スタイル工房/撮影: 山田耕司)

3. リビングの一部を緩やかに仕切ってワークスペースを配置し、2段の段差をつけることで、さりげなくゾーニング。立ち上げた壁はほどよい高さで、デスクに向かっていてもLD側に視線が通り、一体感が保たれる(設計: 建築設計事務所ラジコン/施工: 田村建設/撮影: 松井 進) 4. 書店をイメージしたライブラリーとワークスペースが隣り合うユニークな間取り。気分転換がしやすく、ほどよくこもれて、LDKとも緩やかにつながる絶妙な距離感が心地よい(設計・施工: ツバメクリエイツ/撮影: 水谷綾子)

1. 以前は半独立タイプで暗く、動線も悪かったキッチン、オープンに変更。調理後、振り向くだけで配膳ができるので動きに無駄がなくなったそう 2. 和室と洋室+ダイニング、キッチンに合わせて、大きな窓から光を取り込むLDKに再構築。壁に沿って、キッチン家電などを収めるキャップボードやテレビ台、本棚など多目的に使える収納を造作した 3. パントリーは冷蔵庫置き場と洗面室の間に配置。洗面室とは引き戸で仕切られているので出入りがしやすい。オープンなので動線と使い勝手は抜群 4. キッチンから洗面室、浴室、トイレまでぐりと回遊できる快適な動線を実現。「ストレスのない家事動線は、毎日の生命線です(笑)」と妻

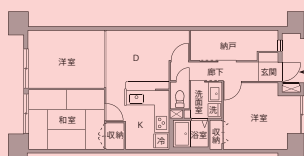
3DK+納戸があった住まい。「長年住んでいると、LDKは窓辺の近くでもっと広げればいいのにと、1か所集中の大きな納戸は使いにくい、などと不満を感じていました」と夫妻。明るく広いLDKと、各所に使い勝手のいい収納を設けた間取りに



After



Before



東京都墨田区 T邸

夫45歳(会社員) 妻44歳(会社員) 長男6歳

工事費：約1590万円

延床面積：67.78㎡

既存マンションの竣工年：1996年

設計・施工：インテリックス空間設計

撮影：中村風詩人

HINT 10

小上がりはいつの時代もやっぱり万能！

マンションはフラットで暮らしやすいぶん、収納スペースを確保しにくいという面も。そうした問題を解決する小上がりは、リライフプラスを創刊した当時から人気があり、もはやリノベーションにおける定番ともいべき手法のひとつ。近年は収納スペース確保のためだけでなく、多目的に使えるスペースとして、家族が集う場として、また構造的な問題の解決策としての小上がりをよく目にするようになった。よりコストダウンするために、「畳ベッド」として販売されている置き家具を設置するケースも。ベンチ代わりに腰掛けたり、ゲスト用の寝室として使用したり、洗濯物を畳んだり、と多目的に使える小上がりは、今後も引き続き根強いニーズがあるのではないだろうか。





2

HINT 09

家事ラクの装置としての 間取りと収納

「家事ラク」をかなえるためのツールやライフハックに関する情報は、常にSNSやテレビ・雑誌などでも発信され続けている。子どもの有無や性別、年齢に関係なく、「家事ラク」は多くの人にとって切実な願いである。だが、やはり共働きで子育てをしている夫婦は格段に忙しく、家事ラク、時短を最優先に考えてリノベーションするケースは多い。Tさん夫妻はまさに共働きで6歳の長男の子育て真っ最中。コロナ禍の影響もあり、妻の仕事がテレワーク中心になったことをきっかけに、15年住んだマンションをリノベーションした。長年住んだからこそ改善したい点は明確だった。半独立タイプだったキッチン、リビングダイニングと一体のオープンスタイルに変更。玄関は広く、洗面室とトイレは配置を変えて動線をスムーズに。また、最適な量、使い勝手の収納を各所に設けることで散らかりにくい仕組みづくりも万全に。住み慣れた家をアップデートして、家事ラクの装置ともいべき動線と収納を備えた住まいを手に入れた好例と言える。



3



4



3



4

1. 4人家族で55㎡とややコンパクトながら、スペースを有効活用して広々と暮らせるようにリノベ。和室だった場所は小上がりとし、リビングと寝室を兼ねたスペースに。布団収納の建具は空間との一体感が出るよう、DIYで白く塗装した（プロデュース・設計：EcoDeco／撮影：遠藤 宏） 2. かつて子ども部屋だったスペースを小上がりの和室に変更。床の上に梁が出ている「逆梁工法」であることを生かし、「逆梁」の高さに小上がりを設定し、下部を収納に利用。寝室や客間、ストレッチやゴロ寝のスペースなどとして、多目的に使用している（設計：後藤組設計室／施工：友伸建設／撮影：山田耕司） 3. 3畳ほどの小上がりは収納量を確保しつ

つ、ベンチとしても使えるよう、高さを決めるときには座りやすさも重視。LDKのインテリアに合わせて和モダンなディテールを取り入れている（設計・施工：スタイル工房／撮影：山田耕司） 4. デザイナーのグエナエル・ニコラさんの自邸。生活の中心となるリビングに、ニコラさんがデザインしたソファ「C-1」を設置。5つのソファを組み合わせた、4畳半大の正方形になっている。専有面積は188㎡と十分なゆとりがあるが、家族の居場所として大切な役割を果たしている（設計：グエナエル・ニコラ（キュリオシティ）／施工：パナソニック建設エンジニアリング／撮影：中村風詩人）

2009

(vol.1 ~ vol.13)

華やかさとラフさの共存

創刊号の特集タイトルにも使われているように、この頃リノベーションに強く求められていたのは「ヴィンテージ感」ではないだろうか。当時、リノベーションを選択した理由を施主に尋ねると「新築物件のツルツル、ピカピカした感じが苦手、つまらない」という声をよく聞いた。彼らの言う「ツルツル、ピカピカ」の対極にあるものが、躯体コンクリート現しの壁や天井、古材、レンガなどをを使ったラフな雰囲気のインテリアだった。ベースは現しの壁や天井、古材やエイジング塗装やアンティーク加工をした無垢フローリング、そこに鮮やかな色のクロスや塗装を取り入れた壁、ヴィンテージ感のある家具など、華やかさとラフさが共存するインテリアが好まれていた。ちなみに vol.8 に写っているのは銭湯で使われていた下駄箱。こうしたインパクトのある古いアイテムを取り入れるお宅もよく見られた。この頃は「リノベーション」という言葉がまだまだ一般的ではなく、「リフォーム」との違いが曖昧だった時期。取材先は住まいやインテリアに対する意識が高いデザイナー、アーティストといった職業の施主が比較的多かった。



2014

(vol.14 ~ vol.31)

「グレー」と「オープン棚」が急増!?

内装はシンプルに仕上げ、家具や雑貨、グリーンなどで自分らしさを表現するインテリアが主流に。「ヴィンテージ感」は引き続き根強い人気があったものの、洗練された小ざれいなインテリアが徐々に増え始めた。この時期多いのがグレーを取り入れたインテリア。躯体表しの天井や壁のほかにモルタルやモールテックス、フレキシブルボードなど、グレーの素材のバリエーションが豊富に。とくにキッチンカウンターをモールテックスで仕上げたカフェのようなスタイルは人気が高かった。また、天井まで造りつけた本棚や、板と金物だけのシンプルな棚の人気が高まり、個人的には「オープン棚急増期」だったと感じている。黑板塗装も人気が高かったが、急速に普及し始めた頃と比較すると、チョークで文字を書くことが目的ではなく、マットな質感を求めて取り入れる傾向に。クセのあるインテリアから小ざれいなインテリアにシフトし始めたのは、リノベーションが30~40代の一次取得層にとって住宅取得の選択肢のひとつとして定着し始め、リノベーション会社が増えてきたこととも関係しているのかもしれない。ちなみに vol.29 の表紙を飾ったのは、築40年超の団地をリノベーションして暮らす憲法学者・木村草太さんの自邸。



インテリアトレンドの変遷

2019 → 2024

(vol.32 ~ vol.50)

今後消費者が求めるリノベは…

精神的な豊かさと 上質な素材を求める傾向に

くつろぎの場がリビングからダイニング・キッチンへとシフト。大きなダイニングテーブルやカウンター付きのキッチンが好まれ、そこで家族が思い思いに過ごしたり、友人を招いて食事を楽しんだり、というライフスタイルが定着。動画視聴環境が大きく変化したことによって、リビングにDVDやAV機器類の収納を設ける必要がなくなり、テレビは置かずにプロジェクターを設置するお宅も増えた。また、コロナ禍を経てワークスペースはもはやデフォルトになり、夫婦それぞれのワークスペースがあるお宅も珍しくなくなった。また、近年はデザインや設備などの目に見えるものだけにこだわるのではなく、精神的な豊かさを求めてリノベーションを選択する人が多くなる傾向に。SDGs的な観点から、既存の良さを最大限に活かすことが求められ、省エネや断熱・耐震といった性能向上に対する意識も高まってきた。インテリアは上質でシンプルなもののが求められ、内装では自然環境に配慮した塗料やクロスを採用する傾向に。ロボット掃除機の普及によって、リビングやキッチンに「基地」を設けたり、コーヒーのマシン類をディスプレイするようにキッチンに設置したりするなど、生活習慣の変化や家電の進化も、リノベーションに大きな影響を与えている。

雑誌は時代を映す鏡。
ここからはリノベーション専門誌である『relife+』の表紙を一挙公開。
そこから見えてくるものとは……。
編集長・君島喜美子が読み解く



ハコはしっかり、間取りはふんわり、気持ちと暮らしは外向き

令和の暮らしと表紙の変遷を俯瞰してみると、「リノベーションの今」を読み解くシンプルな3つのポイントが見えてきた。

ハコはしっかり 断熱・耐震改修で命や健康を守るハコとしてのインフラをきちんと整えることはリノベーションの大前提。イニシャルコストは少しかかるものの、補助金などもうまく活用して温熱環境を良くすることで（戸建の場合は耐震性にも配慮して）光熱費等のランニングコストを抑え、年齢を重ねても長く快適に暮らせるベースとしての「ハコ」をつくること。

間取りはふんわり 小上がりのように多目的に使えるスペースを設けたり、子どもの独立や親の介護などで家族構成が変わっても対応しやすい可変性のある間取りがより求められる。また、アウトドア用のアイテムや自転車などをラフに置ける広々とした玄関土間、通路を兼ねたパントリー、子どもの勉強スペースとしても使えるワークスペースなど、多目的に使えるスペースは今後も高いニーズがあると思われる。

気持ちと暮らしは外向き アウトドアブームの影響もあり、普段の暮らしも室内と外が曖昧なオープンなスタイルが好まれる。マンションの場合は専有庭やルーフトラスなど、外を楽しめる場所がある物件を購入したいというニーズは今後も根強いと思われる。また、自分たちの暮らしを気楽にSNSで発信したり、休日に友人を招いたり、家族だけで暮らしが完結するのではなく、ゆるく繋がりがながら暮らせる住まいが求められる。

リノベーションのタイミングや予算、求めるものは千差万別ではあるが、この3つは多くの消費者が求めるポイントなのではないかと考えている。これらをかなえた上で、その人が好きなものや大切にしていることに寄り添い、それらを活かせる提案をすることがリノベーションに求められるのではないだろうか。